

60代の生活全般の満足度に与える資産水準の影響  
～「60代6000人の声」アンケートの分析

著者名： 野尻哲史<sup>1</sup>

要約

本稿では、資産水準が退職後生活の満足度にどの程度影響するかを2段階で分析した。まず60代6486人のオンライン調査結果から、生活全般の満足度（目的変数）に対して、健康状態、仕事・やりがい、人間関係、資産水準の各満足度（説明変数）で重回帰分析し、資産水準の満足度が最も強い関係があることを示した。次に資産水準の満足度と生活全般の満足度をそれぞれ目的変数として、保有資産額、資産運用の有無、勤労の有無、勤労収入、家族構成、年齢、性別、居住都市の規模などを説明変数として、重回帰分析を実施。生活全般の満足度と資産水準の満足度ともに有意の関係がある変数は、女性、配偶者有り、資産運用実施、世帯保有資産額であった。さらに満足度を質的変数として順序ロジスティック回帰分析も行ったが、年齢の高さ、世帯保有資産額、女性、配偶者有り、資産運用実施が2つの満足度に共通して有意の関係があることが示された。

JEL 分類番号：G

キーワード：生活水準満足度、資産水準、資産運用、2000万円問題

---

<sup>1</sup> 合同会社フィンウェル研究所代表 [nojirisatoshi@finwell.co.jp](mailto:nojirisatoshi@finwell.co.jp)

## 1. イントロダクション

2019年夏、「老後2000万円問題」が喧しくなるなかで、「退職後の生活の満足度はお金だけではない」との指摘も多くなされた。人は何のために現役時代から老後の生活資金を作り上げようとするのか。所得が長期間にわたって伸びないなか、それが退職後の生活の満足度を高めるものでなければ、現在の支出減を伴う資産形成には納得感がない。

本稿では、現役世代における資産形成の努力が結実する退職後の生活の生活満足度を、60代に対するアンケート調査の結果を使って分析した。60代は勤労者と退職者が混在する世代だが、働いていても退職後の生活を最も意識する世代である。この世代の満足度の分析を通じて、現役世代の到達点として、資産水準は生活の満足度を高めるかを確かめる。

## 2. 先行研究

### 2.1. 幸福感と満足度

「退職後の生活は幸せか」の設問は幸福度を聞いているのか、満足度を聞いているのかに関して議論がある。小林・ホメリヒ・見田（2015）は、「幸福感と満足度は異なる規定要因を持った別種の意識である可能性が高く、幸福感を満足度で代替させることには慎重さが求められる」とする一方で、橘木・高松（2018）は「幸福感の統計分析」のはしがきに、「人が所得を得て消費をすれば、効用は高まると考えるのが経済学の出発点である。効用は満足とも理解できる。満足度を幸福度と解すれば、経済学も幸福の分析ができる」と論じている。また袖川・田邊（2007）は、幸福度に関する研究で、「主観的幸福度（Subjective Well-being）は、内閣府が取りまとめてきた「国民生活に関する世論調査」の中にある「生活満足度」のことである」としている。本稿では、経済的な側面を分析する立場から、「幸せ」を満足度として設定し、主観的幸福度が満足度であるとの前提に立って分析を進める。

### 2.2. 満足度を測る共変量・要因

Rath and Harter（2010）はWell-beingの構成要素として、Career Wellbeing（日々の生活の満足度）、Social Wellbeing（生活そのものに対する関わり度合い）、Financial Wellbeing（効率的にお金に関わる生活面を管理可能）、Physical Wellbeing（健康と気力に関わる満足度）、そしてCommunity Wellbeing（生活する地域に関するエンゲージメント）の5つを挙げ、最も効用が大きいのがCareer Wellbeingだと指摘している。

「主観的幸福を測るOECDガイドライン」（OECD, 2013）では、主観的幸福（満足度と読み替える）は生活評価、感情、人生における意義が含まれるとし、それを測定するための測定量として、①人口統計学的属性（年齢、性別、結婚歴、家族構成子供の数、世帯規模、居住地情報）、②経済状態（世帯所得、消費、貧困、住居の質）、③生活の質（雇用状態、

健康状態，仕事と生活のバランス，教育と技術，社会とのつながり，市民参加とガバナンス，環境の質，個人の安全)，④心理的尺度（将来の夢と希望）の4つを挙げている。

また本稿が分析対象とする60代において，古谷野（1993）は65歳以上の在宅高齢者1510名を対象にした分析で，生活満足度尺度K（Life Satisfaction Index-Koyano）を使って，生活満足度に直接的な影響を及ぼしている変数は，健康度，収入，同居既婚子の有無の3つだけであったとしている。しかし高齢者の経済状況を示す変数として資産水準を使っている分析は見つからない。ただ，筒井・大竹・池田（2009）によると，大阪大学COEのアンケート調査「くらしの好みと満足度についてのアンケート」の結果分析から，「緩やかであるが，ほぼ単調に金融資産が多いほど幸福度が高いという関係が得られる。

### 3. 本稿で使用する調査データ

本稿では，2022年1月31日から2月3日まで，合同会社フィンウェル研究所が行った「60代6000人の声」調査の個票データを使用した。同調査は，60代の生活に関する満足度並びに退職後の生活実態，保有所得，生活費水準などをオンラインアンケート方式で行っている。回答者は，人口30万人以上の都道府県庁所在都市の居住者6486人。

### 4. データの整理

アンケート調査の設問である「生活全般の満足度」，「健康水準の満足度」，「人間関係の満足度」，「仕事・やりがいの満足度」，「資産水準の満足度」は，Rath and Harter（2010）のWell-beingの構成要素と相似させた。Well-beingそのものを「生活全般の満足度」とし，日々の生活に対する満足度であるCareer Wellbeingと生活そのものに対する関わり度合いであるSocial Wellbeingを「仕事・やりがいの満足度」で代替，効率的にお金に関わる生活面を管理できているFinancial Wellbeingを「資産水準の満足度」，健康と気力に関わるPhysical Wellbeingを「健康水準の満足度」，そして生活する地域に関するエンゲージメントとしてのCommunity Wellbeingを「人間関係の満足度」として考えた。

なお，分析に使ったデータでは，上記の5つの満足度は，「満足できる」，「どちらかといえば満足できる」，「どちらともいえない」，「どちらかといえば満足できない」，「満足できない」の回答に5点から1点を配点。都市規模は30万人以上100万人未満の県庁所在都市（秋田市，宇都宮市，前橋市，千葉市，新潟市，富山市，金沢市，長野市，岐阜市，静岡市，大津市，奈良市，和歌山市，岡山市，松山市，高知市，長崎市，熊本市，大分市，宮崎市，鹿児島市，那覇市）在住=1，100万人以上の県庁所在都市（札幌市，仙台市，さいたま市，横浜市，京都市，神戸市，広島市，福岡市）在住=2，東京・大阪・名古屋の3大都在住=3とした。また，年齢は60歳=0から69歳=9とした。

世帯保有資産(不動産を含む)と年間生活費は階級値を 100 万円単位の数値とした。世帯保有資産は保有せず=0, 1-500 万円=2.5, 501-1000 万円=7.5, 1001-2000 万円=15.0, 1501-2000 万円=17.5, 2001-5000 万円=35.0, 5001-7000 万円=60.0, 7001 万円-1 億円=85.0, 1 億円超=115.0, また年間生活費は, 0-200 万円=1.0, 201-400 万円=3.0, 401-600 万円=5.0, 601-800 万円=7.0, 801-1000 万円=9.0, 1001-1500 万円=12.5, 1501-2000 万円=17.5, 2001 万円超=22.5.

その他、性別ダミーは女性=1, 男性=0, 就業ダミーは就業している=1, 退職している=0, 配偶者ダミーは夫婦=1, 単身=0, 子どもダミーは同居している子ども有=1, 子ども無し=0, 親ダミーは同居している親有=1, 親無し=0, 公的年金受給ダミーは受給=1, 未受給=0, 資産運用の有無は資産運用をしている=1, していない=0 とした。

## 5. 分析結果

### 5.1 重回帰分析の結果

表 1 に「生活全般の満足度」に対する残り 5 つの満足度との重回帰分析結果を示した。決定係数は修正 R2 乗で 0.5 を上回り, 十分精度がある。「資産水準の満足度」は他の満足度と比較して偏回帰係数が高く, 「生活全般の満足度」に影響度が大きいことを示している。

表 1 : 生活全般の満足度に対する 5 つの満足度の重回帰分析

	偏回帰係数	t 値	p 値	有意水準
健康状態の満足度	0.1607	15.2740	P < 0.001	1%
仕事・やりがいの満足度	0.1902	15.1401	P < 0.001	1%
人間関係の満足度	0.1713	12.9966	P < 0.001	1%
資産水準の満足度	0.4612	47.0429	P < 0.001	1%
都市推奨度	0.0314	6.4894	P < 0.001	1%
R=0.7356, R2 乗=0.5412, 修正 R2 乗=0.5408				

次に 6 項目をそれぞれ目的変数とした重回帰分析の結果, 修正 R2 乗の数値から説明変数として選んだ 11 項目で当てはまりが、ある程度指摘できる水準であったのは「資産水準の満足度」だけであった。またその分析で, 偏回帰係数が高いのは性別ダミー, 配偶者ダミー, 資産運用の有無の 3 つとなった。女性であること, 配偶者がいること, 資産運用をしていることが, 「資産水準の満足度」に相対的に高い影響がある。一方, 世帯保有資産も p 値は低く影響があることを示しているが, 係数は小さい。

就労, 公的年金の受給, 子どもや親との同居, 年間生活費が, 「資産水準の満足度」に影響しなかったことも分かった。

表2：6つの目的変数の重回帰分析結果

	生活全般の満足度		健康状態の満足度		仕事・やりがいの満足度	
	偏回帰係数	P値	偏回帰係数	P値	偏回帰係数	P値
R2乗	0.1521		0.0444		0.0725	
修正R2乗	0.1507		0.0427		0.0709	
都市規模ダミー	-0.0374	0.5071	0.0520	0.3617	-0.0297	0.5579
年齢	0.0253	P < 0.001 **	0.0236	P < 0.001 **	0.0376	P < 0.001 **
性別ダミー	0.1964	P < 0.001 **	0.1430	0.0055 **	0.1770	P < 0.001 **
就労ダミー	0.0029	0.9225	0.1553	P < 0.001 **	0.3718	P < 0.001 **
配偶者ダミー	0.3797	P < 0.001 **	0.2590	P < 0.001 **	0.1700	P < 0.001 **
子どもダミー	-0.0647	0.0231 *	-0.0295	0.3061	0.0018	0.9425
親ダミー	0.0857	0.0466 *	-0.0102	0.8141	-0.0266	0.4916
公的年金受給ダミー	-0.0434	0.2401	-0.0252	0.4992	-0.0182	0.5829
資産運用の有無	0.3159	P < 0.001 **	0.1528	P < 0.001 **	0.0997	P < 0.001 **
世帯保有資産	0.0089	P < 0.001 **	0.0035	P < 0.001 **	0.0033	P < 0.001 **
年間生活費	0.0099	0.0749	-0.0034	0.5434	0.0168	P < 0.001 **
定数項	2.3892	P < 0.001 **	2.7902	P < 0.001 **	2.5529	P < 0.001 **
	人間関係の満足度		資産水準の満足度		居住する都市の推奨度	
	偏回帰係数	P値	偏回帰係数	P値	偏回帰係数	P値
R2乗	0.0596		0.2495		0.0280	
修正R2乗	0.0580		0.2482		0.0264	
都市規模ダミー	-0.0405	0.4131	-0.0773	0.1409	0.2537	0.0212 *
年齢	0.0363	P < 0.001 **	0.0135	0.0248 *	0.0070	0.5786
性別ダミー	0.2315	P < 0.001 **	0.2482	P < 0.001 **	0.0247	0.8038
就労ダミー	0.1575	P < 0.001 **	-0.0017	0.9498	0.1623	0.0048 **
配偶者ダミー	0.3080	P < 0.001 **	0.2102	P < 0.001 **	0.2564	P < 0.001 **
子どもダミー	-0.0039	0.8749	-0.0589	0.0263 *	0.0729	0.1896
親ダミー	0.0638	0.0906	-0.0088	0.8270	0.0467	0.5784
公的年金受給ダミー	0.0002	0.9938	0.0157	0.6485	0.1442	0.0453 *
資産運用の有無	0.1212	P < 0.001 **	0.2758	P < 0.001 **	0.3896	P < 0.001 **
世帯保有資産	0.0025	P < 0.001 **	0.0146	P < 0.001 **	0.0044	P < 0.001 **
年間生活費	0.0038	0.4392	-0.0061	0.2381	0.0068	0.5325

(注) 説明変数の詳細は本文を参照.

## 5.2. 順序ロジスティック回帰分析の結果

満足度を質的変数とみて、順序ロジスティック回帰分析も「生活全般の満足度」と「資産水準の満足度」を対象に行った。説明変数は重回帰分析で有意に関連のある7項目とした。重回帰分析と同様に女性、配偶者有り、資産運用有りの影響が強いことが分かった。

表3：生活全般の満足度と資産水準の満足度の順序ロジスティック回帰分析の結果

	生活全般の満足度		資産水準の満足度	
	偏回帰係数	P値	偏回帰係数	P値
年齢	0.0332	P < 0.001 **	0.0290	P < 0.001 **
性別ダミー	0.3015	P < 0.001 **	0.3848	P < 0.001 **
配偶者ダミー	0.5866	P < 0.001 **	0.3832	P < 0.001 **
子どもダミー	-0.1051	0.0307 *	-0.1058	0.0319 *
資産運用の有無	0.5271	P < 0.001 **	0.5031	P < 0.001 **
世帯保有資産	0.0168	P < 0.001 **	0.0285	P < 0.001 **
年間生活費	0.0211	0.0241 *	-0.0084	0.4027
カイ二乗値, p値	1105.3536	0.0000	1903.8542	0.0000

\* : 5%有意 \*\* : 1%有意

## 6. 結論

60代の生活全般の満足度は、健康水準の満足度、仕事・やりの満足度、人間関係の満足度などを高めることで「お金がなくても幸せ」な状況は十分に達成可能である。しかし生活全般の満足に対する資産水準の満足度の影響は、他の満足度よりも大きく「お金の有ることがより満足度を高める」ことも指摘できる。また重回帰分析の結果並びに順序ロジスティック回帰分析の結果から、保有資産の増加と資産運用をしていること自体が、資産水準の満足度を引き上げることも分かった。生活全般の満足度、資産水準の満足度ともに、配偶者の存在が大きく影響していることも分かった。

ただ、子どもの同居や親の同居がいずれの満足度にもほとんど影響を与えていないこと、資産水準の満足度に就労していることや公的年金を受け取っていることが影響を与えていない点など、一般的な観察とは異なった結果が出ている点は今後の課題として注目している。

## 引用文献

- 金融審議会市場ワーキング・グループ，2019．高齢社会における資産形成・管理
- 小林盾，カローラ・ホメリヒ，見田朱子，2015．なぜ幸福と満足は一致しないのか—社会意識への合理的選択アプローチ．成蹊大学文学紀要，第50号
- 工藤禎子，2019．高齢者のWell-beingに関する指標とその活用．日本地域看護学会誌，Vol.22 No.1
- 内閣府政策統括官（経済社会システム担当），2021．満足度・生活の質に関する調査報告2021—我が国のWell-beingの動向．
- 内閣府大臣官房政府広報室，1958，2022．国民生活に関する世論調査．
- 野尻哲史，2022．60代6000人の声調査レポート．
- 桑原進監訳，高橋しのぶ訳，2015．主観的幸福を測る—OECDガイドライン．明石書店
- 大竹文雄，白石小百合，筒井義郎，2010．日本の幸福度．P33-73，日本評論社
- 袖川芳之，田邊健，2007．幸福度に関する研究～経済的ゆたかさは幸福と関係があるのか～．ESRI（内閣府経済社会総合研究所）Discussion Paper Series No.182
- 橋本俊詔，高松里江，2018．幸福感の統計分析．岩波書店
- Tom Rath and Jim Harter，2010．Wellbeing：The Five Essential Elements．Gallup Press